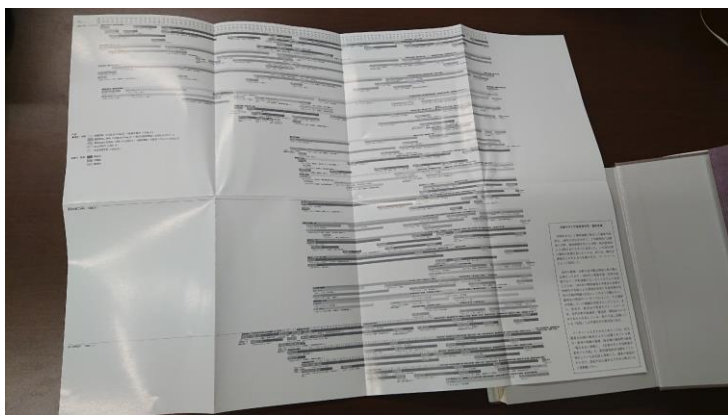
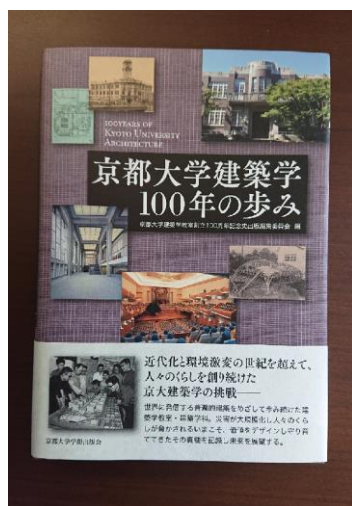


記念出版事業は延期せず本来の 100 周年であった 2020 年度に実施することになり、同年度の京都大学総長裁量経費の出版助成の支援もいただき、年度末の 2021 年 3 月 31 日に「京都大学建築学 100 年の歩み」を刊行することができました。京都大学学術出版会に豊富な経験から助言をいただき、とくに大橋裕和氏にご尽力いただきました。書誌情報や目次・執筆者リストをみても本稿の筆者の氏名は全く登場いたしません、実際には編集責任者として目まぐるしい日々を過ごしました。書籍の記事をいながら、書籍を読むだけではわからないエピソードを、巻頭からたどって、紹介したいと思います。「口絵」 まず最初に登場する口絵の写真集は、最も終盤に緊急に作成することとなりました。そのくらい、複雑な執筆原稿群を取り揃えることに時間と労力が割かれていたということです。なにより旧建築学教室本館の現在の姿が必要と考えられ、2017 年度に比較的大規模な修繕工事が行われた直後に筆者が撮っていた写真を持ち出してきました。そのため玄関内を撮った写真はあくまでも外からガラス越し、なのでガラスに反射した景色も薄く写り込んだままです。3 ページ以降の過去資料は、京都大学本部施設部所蔵（一部桂図書館所蔵）の図版を快く提供いただいたもの、60 周年の記念出版掲載の図の再掲載で構成しました。施設部では、京都大学 100

周年時にキャンパスや諸施設の整備経過のとりまとめ等も手掛けられており、修理等の経過がわかる図版を探すなどにも助言いただきました。貴重な図版には旧教員の西澤英和氏が平成 17 年度に総長裁量経費事業でスキャン作業をされたものも含まれます。筆者がこの書籍の中で 1 ページだけ完全に自分の興味で掲載したのが口絵最後の図です。口絵の構成決定のために図現物を見比べていた時、最も印象的だったのが現花山天文台（大倉三郎 1929）の配筋図でした。歴史を築いた様々なキャンパス内施設の設計者が建築物の設計施工に新たな取り組みを行う時に指定仕様の根拠となる報告書等を残しておられることもこの時に会いました。手間をかけてこそ新しい取り組みを実現してきた歴史を、改めて大切に考えるべきだと実感しました。

「レジェンド編」と「座談会」 書籍の前半は、計画・構造・環境の 3 系ごとに歴史を築いた教員数名について紹介する記事（レジェンド編と仮称）、系を横断して現任教員が 3 つのテーマに集まって自由に会話した座談会、から構成されています。京大建築と言えば、と既に一般に広く知られていること以外の部分に目をむけ、研究・教育の先達としての業績や人物像を伝えることを重視しました。座談会については、原稿に編集する際の挿絵の整備が予想外に手間取りました。自由に語ることで話題は豊富に展開しましたが、そこに関連する図表の添付がのぞまれるときに、適した写真や資料について、記憶をたどって探す、改めて収集する、版權その



他の掲載手続きを行う、等に追われることとなりました。例えば、出版社が既に廃業し著作権所有者情報が出稿に間に合って得られず掲載できなかった過去の雑誌記事もありました。

「コラム」 100 周年のタイミングで書籍編集がなされることをきっかけに、いくつか資料提供の申し出をいただきました。書籍では少し短い記事となりますが、貴重な資料発見の機会でした。そうした内容はコラムとして扱うことになりました。また、60 周年記念の書籍に大学紛争の記録が出来事年月表として記載してあることが、時代をよく客観的に伝えることに気が付き、コロナ禍での大学の日常記録を掲載しようとの提案があり、設計演習にまつわる記録としてコラムを作成しました。さらには、建築系図書室の 100 周年についても掲載したいと提案しました。ここ数年京都大学では図書館機構により桂図書館の整備が進み、学科図書室はより強く連携をもつ全学的な図書館のしくみの一部となりました。書庫や閲覧室を独自にもちそのまとまりが見える存在としての建築系図書室は 100 年でいったん区切りを迎えたので、蔵書に関する紹介が必要と考えたためです。桂への様々な移転作業で多忙な中にもかかわらず、建築系図書室を担当されている長坂氏にコラムを執筆いただきました。図書室が築き上げた蔵書がどのような存在か、様々な特徴を見出すことはこれから面白いテーマとなるようにも推察されます。

「資料編」 283 ページから 413 ページ、さらに巻末の折込み資料が、大部な資料編になります。掲載するために改めて誤記がないか、欠損がないか、大谷先生、聲高先生、吉田先生が丹念な確認の作業を手掛けられました。いくつかエピソードを紹介します。まず、会報等の過去資料等の悉皆的な整理等で大谷先生に多大な作業をいただきました。「建築学教室の建物変遷」は、筆者が大学施設部のキャンパスマスタープラン WG 委員（鉾井先生が定年退職されたときに引き継ぎ）で同席した人間・環境学研究科の山村亜希先生と京都帝國大學一覽掲載の建物配置図について話し合っていた経験から掲載を思い付きました。建築学科の環境形成の節目にあたる配置図と学科の校舎について、60 周年記念の書籍、京大建築会会報、様々な大学刊行のパンフレットやホームページ、これまでの桂キャンパ

ス見学会の資料バックナンバーなどをあわせ、担当 3 先生方とともに作成しました。創立から 1980 年代頃の、吉田キャンパス本部構内の東北角の様子が変わっていく状況を一定再現できたでしょうか。桂移転へどのように記載をつながかも相談し、校舎平面についてはスケールも意識して、移転後に広がった様子をということ で 316 ページの小さな配置図を比較掲載しました。「建築学研究」の総目録掲載については、現役教員のなかからこの貴重な研究論文集をより広く参照してもらえるよう公開していくことが望ましいとの意見がありました。建築系図書室からの助言もあり、著作権処理などを行ってから公開が可能となるため、教員の多忙さもかんがみると、公開には数年を要すると思われます。今回の総目録でどのような論文が掲載されているか探索できるようになりました。これにあわせて、現在出版が続いている Traverse も目次掲載が記録としてよいだろうとの提案がありあわせて掲載しました。巻末に折り込みで掲載した「講座変遷」は、主に聲高先生の苦勞の作です。実は講座の正式な設置年や改組に伴う変化の位置付け、教員の在籍年などは、細部を再確認しないと不明瞭であることが多いのです。しかも、このサイズの表を複数ページに分割して記載しては全体像が見えづらくなります。一枚に全体を収めた資料とするようにこだわることになりました。この全体像掲載は 100 周年記念の出版の中でも最も貴重な初掲載資料と見なしてよいと思います。

最後に、京大建築会会報の存在がいかに過去の出来事の確認に重要か、60 周年記念の書籍がいかに高度に編集された優れたものであったか、を噛みしめています。これからまた会報を 1 年 1 年続けていくことが、最も重要なのだと思います。

